子どもを守る、高崎の新しい取り組み

ヤングケアラーSOS

ほっとTタイム 市長対談

本来は大人が担う家事や家族の世話など、年齢に見合わない過度の負担により、学業や友人関係などへの影響が指摘されるヤングケアラー。今回は、ヤングケアラーのいる家庭を支援するために9月からスタートした「ヤングケアラーSOS」について、実際に支援に携わる皆さんをお招きしてお話を伺います。

市長　ヤングケアラーについては、最近、社会的な問題として取り上げられることが多くなりました。私は、ヤングケアラーの支援は急いでやるべきだと思っていて、「高崎市は日常生活で困っている子どもを救っていこう」という固い決意でこれまで準備を進めてきました。国や県では、子どもたちに「あなたはきょうだいの面倒を見ていますか」など、ネットを通じた調査などで実態を把握しようとしています。しかし、会議での議論や調査に何年も費やしてしまうと、支援に取り組むのが遅くなってしまいます。そこで、市では市立中学校と高校の校長に聞き取りを行い、各学校におおむね1人から2人のヤングケアラーがいることが分かりました。子どもたちが困っている状況は一人一人異なるので、実際に支援を行う際にはきめ細かな対応が必要です。この支援はボランティアの方に無償でお願いするのではなく、しっかりと予算化して、今年の秋から「ヤングケアラーSOS」として本格的にスタートすることになりました。今日はこの事業に携わっていただく皆さんからお話をお聞きしたいと思います。まず小林さんは、市教育委員会の学校教育課長を務めた経験をお持ちで、その後も、市のこども救援センターで相談員として児童や家庭に対する支援を行っていただきましたが、これまでに「手厚く支援してあげないといけないな」と感じた家庭やお子さんはいらっしゃいましたか。

富岡 賢治市長

「高崎の子どもは高崎で守る」という決意のもと子どもたちへの支援に取り組む

小林　そうですね。学校で教員をしていた頃、家庭内でいろいろな問題を抱えていて学校に来られないお子さんがいました。こども救援センターでご家庭からの相談を受ける中でも、支援を必要としているお子さんがたくさんいることを改めて感じました。

小林 裕子さん

市ヤングケアラー支援推進委員。教員や相談員など児童に対する豊富な支援経験を持つ

市長　貧困や家庭不和、親御さんが子どもの面倒を見ることができないなど、さまざまなケースがあると思いますが、こども救援センターでは、誰からの相談が多いのですか。

小林　学校や地域の人からの他、ご家庭から直接の相談が多いです。

市長　学校の先生からはどのような相談がありますか。

小林　学校の先生は直接お子さんを見ていますので、学校に通えなくなっている状態のお子さんが家庭内でどのように生活しているのか、心配して相談されることがあります。高崎市は各学校にスクールソーシャルワーカーが配置されているので、学校から家庭の状況を確認したり指導したりしてくれていますが、それでも心配ということで連絡があります。

市長　親御さんの手伝いや幼いきょうだいの世話を過度に担ってしまっている子どもは、部活動や勉強、友達付き合いが十分にできないので、行政が組織的に対応して手を差し伸べていくべきだと私は思っています。ヤングケアラーSOSでは、家庭内で子どもたちの負担になっている家事、介護、調理、洗濯などの支援のため、「サポーター」を派遣しますが、実際に現場でご活躍いただくのが、中嶋さんや碓田さんのような方々です。お二人が在籍するケアサプライシステムズは、本市の介護SOSサービスでの実績をお持ちなので、この事業でも頼もしい会社にご協力いただけたと思っています。ケアサプライシステムズには、サポーターとして活動できるホームヘルパーさんは何人くらいいらっしゃるんですか。

中嶋 友紀さん

ケアサプライシステムズ㈱。ヤングケアラーSOSのワーキングチームで支援内容の調整を担う

中嶋　現在、300人くらいがホームヘルパーとして登録してくれています。今回のヤングケアラーSOSでは、対象者が児童・生徒ということで、保育士の資格を持つ人や、学童保育の経験がある人からもヤングケアラーサポーターに手を挙げていただいて、私たちも心強く思っています。

市長　そうですか。それはありがたいですね。碓田さんは介護ヘルパーの仕事に携わってどれくらい経ちますか。

碓田　ケアサプライシステムズでは10年になります。その前に8年間、別の事業所にもいました。私がこの仕事を始めたのは、福祉関係の仕事をしている友達から、ヘルパーの資格を取ろうと誘われたことがきっかけです。

市長　長くこの仕事を続けていらして、頭が下がりますね。日頃、利用者の家庭を訪問する際に心がけていることはありますか。

碓田　はい。利用者のご家庭に入るときには、初心を忘れずに丁寧に接するように心がけています。

中嶋　若いヘルパーからは、訪問介護は一人一人にケアを行うので、利用者さんからの感謝の気持ちがダイレクトに伝わってくるという、施設介護とは異なる部分に喜びを感じるという声を聞きます。短時間の訪問もあるので、ダブルワークで働く方もいらっしゃいます。

碓田 和子さん

ケアサプライシステムズ㈱。介護福祉士。サポーターとして家庭を訪問し、子どもたちを支援

市長　最近の働き方の特徴ですね。この事業は中高生が相手ということで難しさもあるかもしれませんが、それでも手を挙げてくれる人がいるというのはありがたいですね。最後に皆さんから、事業の開始に向けて一言いただけますか。

小林　ヤングケアラーという言葉は聞くようになりましたが、実際に子どもたちがどのような困り事を抱えているのかは、なかなか分かりません。子どもたちの将来や夢を狭めてしまうことにつながりかねないので、この事業をきっかけにして、子どもたちのことを皆で考えられるようになってほしいですね。

中嶋　私たちの活動や実績が増えて、地域の皆さんや社会全体で子どもたちを支えていける事業になるといいと思います。

碓田　子どもたちがいつもニコニコと、心から笑い合えるような家庭や社会を作れるよう、現場の活動に携わっていきたい思います。

市長　高崎の子どもたちのために、一緒に頑張っていきましょう。本日はどうもありがとうございました。

一同　ありがとうございました。

個別のワーキングチームを結成。子ども一人一人に合った支援方法を検討します

「ヤングケアラーサポーター」が支援を必要とする家庭へ訪問。家事や介護をお手伝いします

対談の様子を動画でご覧いただけます

新型コロナ感染症対策を取り、参加者の皆さんの了解を得た上でマスクを外して撮影しています